世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

村上春樹『ノルウェイの森』論：語るワタナベ、語られる突撃隊、導く緑

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学武蔵野文学館 公開日: 2024-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加地, 花百 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000347

村上春樹『ノルウェイの森』論
――語るワタナベ、語られる突撃隊、導く緑――

加地　花百

1

『ノルウェイの森』[1]は、一九八六年という「現在」を生きるワタナベが、一八年前の一九六八年という「過去」を回想するところから始まる。彼が一八年も前のことを回想する理由はただ一つ、《直子との約束を守るため》だ。

直子は、《私のこといつまでも忘れないで。私が存在していたことを覚えていて》とワタナベに言い残し、一九七〇年に自死する。しかし、時の流れとは残酷なものだ。《いつまでも忘れない》、《忘れられるわけがない》と約束したはずのワタナベは、次第に直子の記憶を失っていく。

一方で、かつて直子と歩いた草原の風景だけは、今もはっきりとワタナベの中に残っていた。だが、記憶の中の草原にはもう誰もいない。直子も、一八年前のワタナベも、そのときのワタナベの《世界》も、みんなどこかに《行ってしまった》。直子の記憶を失いつつあるワタナベは、直子と過ごした自分自身のことも忘れつつあるのだ。そして、一八年前のワタナベを構成していた《世界》――かつての自分が関わっていた全ての人物たちのこと――までも忘れつつあるのだ。

誰もいなくなった草原の記憶は、ワタナベに《くりかえしくりかえし》、《おい、起きろ、俺はまだここにいるんだぞ、起きろ、起きて理解しろ、どうして俺がまだここにいるのかというその理由を》と呼び掛ける。一八年前に交流があった全ての人物たちの記憶が失われつつあるということを理解しろ、そして思い出せ、と草原は必死に呼び掛けている。

これを受け、ワタナベは《骨でもしゃぶるような気持で》必死に《記憶を辿りながら》文章を書き記しはじめる。彼は、ただ思い出すことに努めるのではない。《どうして俺がまだここにいるのかというその理由を》理解するために、わざわざ書くという行為を選ぶ。「書く」と、書いた

ものが文字として「残る」。「残る」と、誰かによって「読まれる」可能性が生まれる。つまり、彼が現時点で思い出せる限りのことを「書き残す」と、それが誰かによって「読まれる」ことで記憶が「引き継がれる」ことになるのだ。そして、ここで読者として想定される人物こそ、未来のワタナベ自身なのである。

彼は《記憶を辿りながら》、《ひょっとして自分はいちばん肝心な部分の記憶を失ってしまっているんじゃないか》と不安を溢す。記憶が失われてしまうと、それが重要なものであったかどうかも分からなくなってしまう。だからこそ彼は、まだ僅かに記憶が残っている今、思い出し得る記憶を書き残そうとするのである。紛れもない、未来の自分が過去を思い出し続けられるように。

だが、ワタナベは、ただ過去の人物たちの情報を羅列するわけではない。彼は、一八年前の彼自身を構成する《世界》を必死に書き残そうとする。過去の人物たちと過去の自分との関係――相手に何をしてもらって、自分は何をしたのか――を彼は未来の自分に忘れないでほしいのだ。そして、そのことを忘れてはならないと思っている。

つまり、彼にとって《直子との約束》とは、一八年前に自分が、直子を含む全ての人物とどのように関わっていたのかを《覚えて》いることなのである。この《約束を守るため》、ワタナベは『ノルウェイの森』を書きはじめる。これは、一九六八年のワタナベから一九八六年のワタナベに宛てた手記なのである。

彼はこの手記に、なぜか突撃隊を何度も登場させる。家を訪問するまでの仲だった伊東は一度しか登場させていないにもかかわらず、特別親しいわけではなかった[2]突撃隊のことは何度も想起し、何度も書き残す。しかも、突撃隊が姿を消した一九六九年の時点で想起していたことまで想起して書き残す。

ワタナベはなぜか、そこまで親しくなかったはずの突撃隊とかつての自分がどう関わっていたかを忘れてはならないと思っている。未来の自分に忘れないでほしいと思っている。一九八六年を生きる彼にとって、突撃隊とは何らかの重大な意味を持った存在なのである[3]。

しかし、突撃隊はこれまで十分に論じられてこなかった[4]。確かに、突撃隊に関する情報はテクスト内にそう多くない。彼が突然姿を消して以降、その理由を探る展開になるわけでもなければ、それによって一九六九年頃のワタナベに大きな変化が見られるわけでもない。彼は一見する限り、テクストにおいて重要な人物であるとは言い難いだろう。『ノルウェイの森』研究において突撃隊が注目されてこなかったのも不思議ではないのだ。しかし、彼が突然姿を消した理由とそれによる影響にあえてこだわってみるとすれば、どうなるだろうか。先に結論から述べると、突撃

隊は「男らしさ」を巡る闘いの犠牲者であり、そのことが一九八六年を生きるワタナベに何らかの重大な影響を及ぼしていると考えられる。つまり、手記を書くワタナベにも、テクスト全体にも何らかの重大な影響を及ぼす突撃隊は、論じる意義のある存在なのである。本稿はこの仮定に基づき、論を進めていく。

一九八七年に発表され、ベストセラーとなった本テクストは、多くの言論人に男性中心主義的な物語として読まれてきた。早くは一九九二年、フェミニストとしても活躍していた上野千鶴子、小倉千加子、富岡多恵子が、高い評価を確立している男性作家のテクストを女性の立場から再検討した鼎談[5]の中で、本テクストを批判的に採り上げている。そこで小倉は、ワタナベが女性に対して〈酷薄で、すごいエゴイスト〉であること、村上春樹が女性だけを、愛情と性欲を結び付けて捉えている存在として描いていることを例に挙げ、それが〈すごい不愉快〉で〈気分、悪い〉と語る。以降、ワタナベの語りに男性中心主義性を見て取る言説は継承され、村上春樹批判の要諦となった。これは二〇〇〇年代になるとますます踏襲されるようになり、現在でもなお先行研究の趨勢の一角を担っている[6]。しかし、男性中心主義性を批判するこれらの論においても、突撃隊は十分に論じられていない[7]。つまり、これらは女性が「女らしさ」に縛られていることばかりに注目しており、男性も「男らしさ」に縛られているということにまで射程が及んでいないのだ。

そこで本稿は、男性中心主義を相対化する視点を獲得するために、男性中心主義社会の解体を目指したウーマン・リブ、メンズ・リブに着目する。そして、この視点に基づいて、手記を書き残すワタナベの語りにおけるジェンダー認識を考察する。また、その過程で突撃隊の重要性を明らかにすることで、村上春樹[8]が本テクストで描こうとした、闘いによって失われた〈カジュアルティーズ〉の姿を捉え直す。こうして、男性を縛る「男らしさ」の観点から本テクストを読むことで、ワタナベが手記を書き残す意味を明らかにしたい。

2

しかし、前述の通り、突撃隊を論じようにも彼に関する情報はテクスト内にそう多くない。そこで、本稿は突撃隊と入れ替わるようにして登場する緑に注目する[9]。これまで緑は、「女らしさ」というジェンダー規範に囚われていないウーマン・リブ的な女性であると指摘されてきた[10]。本稿が定義するウーマン・リブとは次の二点である。第一に、男性が創り出した「女らしさ」から自由になることを目指した運動[11]。第二に、「女らしさ」に抵抗したい自分と「女らしさ」を体現してしまう自分という相反する二つの本音

の間の〈とり乱し〉から始まった運動[12]。緑とは、男性が創り出した「女らしさ」を男性に押しつけられることに違和感を覚え、異議を唱え、時に行動までできる、まさに「女らしさ」に抵抗する女性である[13]。また、「女らしさ」を批判し抵抗する緑にも、想い人であるワタナベの前では「女らしさ」が見て取れる[14]。ここから、緑をウーマン・リブ的な女性と位置付けることが可能となる。テクスト内で際立つ緑の積極性、主体性はウーマン・リブとの共通項でもあるのだ。

しかし、これはテクスト内に限ったことではない。一九七〇年代の恋愛事情では、女性から男性にアプローチすることは稀であった。また、一九九〇年代以降に女性からのアプローチが一般的になってもなお、やはり女性が想いを告げることは珍しかったという[15]。つまり、一九六九年から一九七〇年の時点で、ワタナベを食事や自宅に誘い、何より自分から想いを告げる緑の積極性、主体性は現実社会においても際立っているのである。

また、吉本隆明[16]は一九八七年に発表した論において、男性に対して〈性愛について陰影の感じを与えることができない〉緑には〈愛が不可能〉だと指摘している。テクストに初めて緑が登場した一九六九年や、日本のウーマン・リブ元年とされている一九七〇年から約二〇年経ってもなお、性にあけすけな女性は異常と見做されているのである。

つまり、ワタナベが回想する一九六八年頃の社会においても、本テクストが刊行された一九六八年頃の社会においても、緑は突出した存在であったと考えられるのだ。

3

「女らしさ」というジェンダー規範に抵抗する一方で準拠もする、まさにウーマン・リブ的な女性としての緑。彼女と入れ替わるようにして退場している突撃隊を「男らしさ」、メンズ・リブとの関連性から捉えることはできないだろうか。確かに、テクストにおいて「男らしさ」は「女らしさ」のように直接言及されてはいない。しかし、「女らしさ」「男らしさ」とは、対称的な概念ではなくとも対照的な概念ではあるだろう。また、テクスト内世界と現実社会の時代性、歴史性が対応している以上、ウーマン・リブの問題提起を受けて興ったメンズ・リブがテクストに内包されていても不思議はない。そこで、まずは男性共同体としての男子学生寮に着目することで、テクストにおける「男らしさ」を明らかにしたい。

学生寮において突撃隊は、右翼学生のような出で立ちから、《病的なまでに清潔好き》という性格、そして女性のヌード写真が嫌いで風景の写真を好むという趣味まで、寮生たちから笑いの対象として消費されている。

しかも、それは突撃隊が変化してもなお変わらない。右翼学生を彷彿とさせる紺色のセーターしか持っていなかった彼は、鹿の編み込みが入った赤と黒の可愛いセーターを身に着けるようになる。しかし、突撃隊の右翼学生のような出で立ちを笑っていたはずの寮生たちは、変化した突撃隊の姿を見て大笑いする。彼らは突撃隊の特徴を笑っているのではなく、突撃隊そのものを笑いの対象としているのだ。

これは、男性共同体における〈「非モテ」男性〉という存在に類似している。西井開[17]によると、〈「非モテ」男性〉とは女性との関係だけでなく、対男性との関係においても苦悩を抱えているという。この苦悩の原因とは、男性共同体から浴びせられる〈からかい〉にある。ここで基準として用いられる「男らしさ」は、男性共同体の中の〈権力を持つ男性〉が〈周囲の男性を貶めるため〉に〈恣意的につく〉るものである。しかし、これは男性共同体の中で〈誰しもが共有している「普遍的・自明的」なもの〉と見做される。したがって、例え〈「非モテ」男性〉が〈努力をしてからかいの条件を克服〉したとしても〈からかい〉は止まることがない。〈また別の条件〉から新たに〈からかい〉を受けることになるだけだ。こうして〈「非モテ」男性〉は、どうすれば〈からかい〉を受けずに済むのか、どうすれば「男らしく」なれるのか分からず苦悩し、自己否定感、劣等感を積もらせることになる。

〈からかい〉の対象から抜け出すには、そのコミュニティ〈から離れる〉他ない。しかし、多くの男性が〈そこにしか自分が存在証明される世界がないと思い込んでいる／思い込まされているために、必死に中心メンバーとの関係性に縋りつ〉く。そして、〈男性同士のからかいの会話形式や「男らしさ」をめぐる競争の文化を無自覚に維持していく〉。なぜなら、彼らが生きる世界は、〈権力を持つ男性〉が〈からかい〉を通して〈周囲の男性を貶める〉場所だからである。そこでは誰もが、〈いつ排除されるか不安を抱え〉、〈排除されないよう〉に「男らしさ」の〈「達成」を目指し続ける〉。故に彼らは〈コミュニティの力学〉によって、〈お互いにまなざしを向け合いながら〉誰かの「男らしさ」〈から逸脱した部分を粗さがしする〉ことを〈強いられ〉るようになる。

ここでいう〈権力を持つ男性〉が、寮生たちに《一目置》かれている永沢に類似していることは明らかであろう。誰もが彼に対してだけは強いことを言うことができない。誰もが彼に何かを要求されると文句ひとつ言わずにその通りにしないわけにはいかない。彼は男性共同体において、特別で絶対的な存在なのである。つまり、テクストにおける「男らしさ」とは永沢を意味するのだ。男性共同体の構成員である寮生たちは、男性共同体内での居場所を守るため

「男らしさ」の象徴である永沢を目指し、その過程で他の男性たちを蹴落としていく。

優れた知能、学歴、職歴、家柄、財力、容姿、カリスマ性、女性に対する話の上手さにスマートさ、精神力の強さ、大きな性器に豊富な女性経験、魅力的な恋人の存在、女性に困ることがないほどの人気ぶり。これら全ての要素を兼ね備えた永沢と突撃隊がどれほどかけ離れているかは言うまでもないだろう。〈恣意的につく〉られた「男らしさ」から逸脱する突撃隊は「男らしさ」を競い合う寮生たちに利用され、〈からかい〉の標的にされているのだ。つまり、男性共同体の中で笑いの対象にされる突撃隊は「男らしさ」から疎外されている男性なのである。[18]

しかし、突撃隊はただ疎外されているだけではない。勿論、「男らしさ」に抵抗を示すこともなければ「男らしさ」からの解放を目指して行動することもない。だが、「男らしさ」の〈「達成」〉を至上ともしていないのだ。寮生たちは、男性が住む部屋は不潔かつ不衛生なもので、壁には女性の写真が貼られているものだと思い込んでいる。そして、これこそが「男らしさ」であると認識してさえいる。だが、突撃隊はこれに同調することはない。また、彼はどうすれば女性を落とすことができるか、ではなく、どうすれば女性との会話に困らないかを気にしている。女性のヌード写真を嫌う彼は、女性に男性のための性的身体としての存在を押しつけていないのだ。むしろ、女性を意思ある一人の人間として捉えている。つまり、突撃隊は「女らしさ」や「男らしさ」を自明のものとして引き受けていないのだ。そのような彼の姿からは、「女らしさ」に縛られる女性への理解と「男らしさ」に縛られる男性の苦悩が読み取れる。

本稿が捉えるメンズ・リブの姿とは、男性が女性を「女らしさ」に、男性自身を「男らしさ」に縛ってきたことを自覚したうえで、社会の中心部分から男性中心主義社会を解体し、「男らしさ」から自由になることを目指した運動[19]である。だが、声をあげることも行動に移すこともない突撃隊はメンズ・リブ的男性とは言い難い。しかし、男性中心主義的な男性とも言い難い。確かに突撃隊は「女らしさ」「男らしさ」を直接的に批判することはない。しかし、批判的な言動が見られないだけで、それら支配的なジェンダー規範に同調することがないのも、引き受けようと努めることがないのもまた事実なのである。[20]つまり、突撃隊は男性中心主義に対する批判的主体としての、メンズ・リブ的な男性になる可能性を秘めた存在だと考え得るのだ。[21]

4

ウーマン・リブ的な緑とメンズ・リブの一歩手前に位置する突撃隊。両者は「女らしさ」「男らしさ」という規範に対する姿勢――積極的に批判するか否か、時に行動まで

して抵抗するか否か――に違いがある。だが、程度の差はあれど、どちらもそれらに縛られているという問題意識を抱えている。つまり、緑は突撃隊にできなかったことをやってのけているのである。突撃隊と入れ替わるようにして登場する緑は、彼を引き継いでいるのだ。

同様に、ウーマン・リブとメンズ・リブはどちらも「女らしさ」「男らしさ」からの解放を目指すという点で共通している。ウーマン・リブのマニフェストとも言われる、ぐるーぷ・闘うおんなの「便所からの解放」[22]は、男性にとっての女性が、優しさの象徴としての〈母〉か性欲処理機としての〈便所〉でしかないと指摘する。そのうえで、性欲処理機としての〈便所〉に排出されている男性の性は、〈汚物〉なのだと高らかに言い放つ。ぐるーぷ・闘うおんなは、女性の性を抑圧する男性もまた、男性自らの性に抑圧されていると考えたのである。つまり、ウーマン・リブが目指す〈便所からの解放〉とは、男性による抑圧から女性だけでなく、男性までも解放することを含むのだ。しかし、社会が男性中心である以上、周縁に位置付けられた女性だけで男性中心主義社会を解体することは難しい。これを受け、メンズ・リブは社会の中心部からの解体を目指した。つまり、メンズ・リブはウーマン・リブができなかったことを引き継いでいるのである。

メンズ・リブの一歩手前に位置する突撃隊の問題意識が緑に引き継がれていることと、ウーマン・リブが男性を「男らしさ」から解放することにまで射程を持っていること。突撃隊にできなかったことを緑が達成しようとすることと、メンズ・リブがウーマン・リブの問題提起を受けて興ったこと。テクスト内世界と現実社会の動きが類似していることを踏まえると、突撃隊の未来は緑によって切り拓かれる可能性があったと考えられる。つまり、ウーマン・リブによって「女らしさ」「男らしさ」からの解放が謳われ、それがメンズ・リブにまで引き継がれた時代であったならば、突撃隊が「男らしさ」を巡る競い合いの中で標的にされることもなかっただろうと推測されるのである。

このことを、手記を書く一九八六年のワタナベも気付いているからこそ、ウーマン・リブ的な緑をメンズ・リブの一歩手前に位置する突撃隊と入れ替わるようにして登場させたのだろう。一九八六年とは、ウーマン・リブが興って十年以上経ち、数年後にはメンズ・リブが生まれようとしている時代である。つまり、少なくともウーマン・リブによって女性が「女らしさ」に、男性が「男らしさ」に縛られていることが露呈し、「女らしさ」「男らしさ」が問い直された時代なのである。この時代を生きるワタナベは、男性としての自分と向き合わざるを得なかったことだろう。彼はそこで、かつての自分が「男らしさ」に縛られていたことを自覚した[23]。彼もまた、男性共同体における自らの居

場所を確保するため闘っていたのである。

第一に、ワタナベは「男らしさ」の象徴たる永沢と親しくしていた。彼は『グレート・ギャツビイ』を好むという共通点を持った友人としてではなく、「男らしさ」の象徴である男性としての永沢と付き合うことを選ぶ。[24] これは、永沢の恩恵を受けると男性共同体内で優位に立てるためであろう。ワタナベは、「男らしさ」を巡る競い合いを制するために永沢をいわば利用していたのである。

第二に、寮生たちに《突撃隊ジョーク》を提供していた。彼は、突撃隊を《笑い話のたねにするのはあまり気持の良いものでは》ないと言いつつも、《みんなに突撃隊の話を提供しつづけること》を止めない。《あまり裕福とはいえない家庭のいささか真面目すぎる三男坊にすぎ》ない、ただ地図を作ることだけを夢見る突撃隊を誰が《笑いものにできるだろう》と彼は自問自答しながらも、嘘をついてまでして突撃隊を笑いの対象に仕立て上げる。これは、突撃隊を標的にすると男性共同体内での自らの居場所を守ることができるためであろう。ワタナベは、突撃隊をも利用していたのである。

彼がこうまでするのは、突撃隊に共感できてしまう部分があるからに他ならない。[25] ワタナベには突撃隊同様、綺麗好きの気がある。[26] また、性的身体としての女性に関心を示さないという共通点もある。[27] つまり、ワタナベもまた寮内における「男らしさ」の基準からかけ離れた存在なのである。ワタナベにも男性共同体における笑いの対象になる可能性があったのだ。しかし、それは突撃隊やワタナベに限ったことではない。「男らしさ」の象徴たる永沢以外は皆、男性共同体から排除され得る。そして、誰もがそれを自覚している。だからこそ、突撃隊を排除の標的にしようという共通認識が寮生たちに生じたのだ。つまり、突撃隊は「男らしさ」に縛られた者たちによって男性共同体から排除されたのである。「男らしさ」によって淘汰された突撃隊。彼は、姿を消したというよりも姿を消されたのである。

一九八六年のワタナベは、この突撃隊への加害性を自覚した。そして、深く傷付いた。なぜなら彼は、かつて学生寮を退寮したからである。[28] それ以前のワタナベは、「男らしさ」を巡る競い合いの中で生き残るべく、突撃隊を含む他の男性たちを蹴落としてきた。しかし、彼は男性共同体を脱することで、常に抱えていた排除の恐怖から解放されたのである。他の男性たちは、「男らしさ」を巡る闘いの中で、傷付き、苦しみ、淘汰されているにもかかわらず、ワタナベは彼らを見捨てて自分だけ自由になったのだ。退寮後に彼が手にしたものとは、彼らの犠牲によって得た自由だったのである。

一九八六年のワタナベは、かつての自分が「男らしさ」

に縛られていたことをウーマン・リブによって自覚した。そして、そのことについて省察する中でかつての自分が「男らしさ」を巡る闘いの中で他の男性たちを蹴落としてきたこと、その犠牲によって自由を獲得したことを、突撃隊によって自覚した。突撃隊とは、一九八六年のワタナベに自らの罪を自覚させる存在なのである。[29] ワタナベの中には、何かしらの引っ掛かりがあったのだろう。だからこそ、彼は一八年経ってもなお突撃隊のことを忘れられなかったのである。

ワタナベは自らの罪を忘れてはならないと思っている。他にも何か忘れてはならない罪があるにもかかわらず、その《いちばん肝心な部分の記憶を失ってしまっている》かもしれないことに怯えている。だからこそワタナベは、まだ僅かに記憶が残っている今、過去の人物たちと過去の自分との関係を必死に思い出しながら書き残そうとするのである。彼は自らの罪を理解するために、それを未来の自分に引き継ぐために手記を書き残す。彼はまさに《直子との約束》を守ろうとしているのだ。なぜなら彼は、直子のことまでも「女らしさ」に縛っていたのだから。[30]

ワタナベは、「男らしさ」を巡る闘いの中で、多くの男性たちを犠牲にすることで生き残ってしまったことに深く傷付く。男性中心主義による支配が未だ根強い一九八六年に、この罪と向き合い、男性中心主義的な自分を批判しなければならないことに深く傷付く。それでもワタナベは、ウーマン・リブの導きによって自覚した自らの罪を必死に語ることで、過去を未来に引き継ごうとするのである。こうして書かれた手記は、まさに村上春樹[31]が描こうとした〈カジュアルティーズについての話〉でもあり、〈カジュアルティーズのあとに残って存続していかなくてはならない〉人の話でもあるのだ。[32]

注

(1) 村上春樹『ノルウェイの森（上）』、『ノルウェイの森（下）』講談社、一九八七年九月

(2) ワタナベは、学生寮の中で《親しくつきあっている》人物に永沢の名だけを挙げる。ワタナベにとって突撃隊とは、単なるルームメイトに他ならないようだ。

(3) 突撃隊はワタナベにとって特別親しい人物ではない。つまり、突撃隊は一見、ワタナベにとってもテクストにおいても特別な意味を持たないように思える。これと同様に、一見、特別な意味を持たないように見える「武蔵野」に着目したものとして、「『ノルウェイの森』と〈武蔵野〉」（『武蔵野文学館紀要』第五号、二〇一五年三月）がある。事実、テクストには「武蔵野」という単語が登場する。しかし、「武蔵野」はワタナベにとって特別思い入れのある場所として

直接的に語られるわけではない。しかし高木は、テクストの空間描写にイメージとしての「武蔵野」の面影を見て取ることで、『ノルウェイの森』論に新しい視点を提供している。

（4）突撃隊について言及する数少ない先行研究に、まず今井清人「『ノルウェイの森』――回想される〈恋愛〉、もしくは死――」（栗坪良樹・柘植光彦編『村上春樹スタディーズ03』若草書房、一九九九年八月【初出：『文研論集』、一九八九年一〇月】）、遠藤伸治「村上春樹「ノルウェイの森」論」（『近代文学試論』第二九号、一九九一年一二月）がある。しかしこれらは、ワタナベを論じるために突撃隊を用いているに過ぎず、突撃隊自体を論じているわけではない。次に、突撃隊が姿を消した理由に関して言及しているものに、堀口真利子「『ノルウェイの森』――父をめぐる緑の病」（酒井英行・堀口真利子編『村上春樹『ノルウェイの森』の研究』沖積社、二〇一一年九月）、半田淳子『村上春樹、夏目漱石と出会う――日本のモダン・ポストモダン』（若草書房、二〇〇七年四月【初出：『東京学芸大学紀要』、二〇〇四年二月】）、加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』（岩波書店、二〇一五年一二月）、酒井英行「『ノルウェイの森』への一視点――突撃隊と永沢さん――」（酒井英行・堀口真利子編『村上春樹『ノルウェイの森』の研究』沖積社、二〇一一年九月）がある。しかし、これらは根拠が不十分であり、かつ、突撃隊の退場を本テクストにおける重要な出来事と捉えているわけではない。

（5）上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房、一九九二年一月

（6）ワタナベの語りを批判するものに、太田鈴子「女性をモノ化するヘテロセクシズムの物語――村上春樹『ノルウェイの森』――」（『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第二四号、一九九九年七月）、佐藤泉「上野千鶴子と村上春樹はともにリブを相続し…――『ノルウェイの森』の二重言語」（柘植光彦編『解釈と鑑賞 別冊 村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』至文堂、二〇〇八年一月）がある。女性から始まった本テクストへの批判は、村上春樹作品全体を批判する小谷野敦『反＝文藝評論――文壇を遠く離れて』（新曜社、二〇〇三年六月）、小森陽一「『ノルウェイの森』における女性嫌悪」『台湾日本語文學報』第三二号、二〇一二年一二月（初出：二〇一二第一回村上春樹国際学術討論会講演予稿、二〇一二年六月）によって引き継がれていくことになる。

（7）一方、本テクストを男性中心主義的ではないと捉えるものに、水田宗子「ジェンダーのロストジェネレーションたち」（『村上春樹がわかる。（アエラムック75）』朝日新聞社、二〇〇一年一二月）、三枝和子「『ノルウェイの森』と『たけくらべ』」（栗坪良樹・柘植光彦編『村上春樹スタディーズ

03』若草書房、一九九九年八月【初出：『ユリイカ』、一九九〇年九月】）がある。しかし、これらにおいても突撃隊は論じられていない。

（8）村上春樹「「自作を語る」100パーセント・リアリズムへの挑戦」（『村上春樹全作品1979～1989⑥ノルウェイの森』講談社、一九九一年三月）

（9）緑と突撃隊の入れ替わりに注目するものとして、山﨑眞紀子「直子の乾いた声――村上春樹『ノルウェイの森』論、『めくらやなぎと眠る女』とともに。」（『札幌大学総合叢書』第二九号、二〇一〇年三月）がある。

（10）緑を「女らしさ」の観点から論じるものに、酒井英行「村上春樹・『ノルウェイの森』論（Ⅱ）」（『人文論集』第五四巻第一号、二〇〇三年七月）、佐藤前掲論（注6）、堀口真利子「村上春樹・江國香織小説研究――親密性をめぐって」（名古屋大学大学院文学研究科、二〇一四年三月、博士論文）がある。佐藤は、ウーマン・リブと緑との関連性を指摘しているが、酒井、堀口はウーマン・リブとフェミニズムの両者を併用して緑との関連性を指摘している。しかし、これらはウーマン・リブやフェミニズムをどのような運動として捉えているか立場を明確にしていないという点で不十分だと言わざるを得ない。また、上野千鶴子「日本のリブ――その思想と背景」（井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『リブとフェミニズム：日本のフェミニズム①』岩波書店、一九九四年一一月）によると両者は時期によって呼称が異なる。そこで本稿ではテクスト内時間に合わせて、ウーマン・リブという呼称に統一する。

（11）萩野美穂『女のからだ――フェミニズム以後』（岩波書店、二〇一四年三月）は、学園闘争が急速に退潮に向かった一九六九年頃、〈それまで学園闘争やヴェトナム反戦運動などに参加したり共感したりしていた若い世代の女たちの間で、反体制運動のなかにも強固に存在する「男らしさ」幻想や女性差別に幻滅し、女独自の運動の方向性を模索する動きが生じ〉たと説明する。そして、これら個別の動きが互いに繋がり始めた一九七〇年にウーマン・リブは誕生したと紹介する。また、ウーマン・リブの大きな特徴として、女性が自らの性や身体について率直に語ることを挙げる。他方、ウーマン・リブ運動に参加していた過去を持つ井上輝子は、秋山洋子と池田祥子との座談会「座談会・東大闘争からリブ、そして女性学、フェミニズム」（女たちの現在を問う会編『全共闘からリブへ――銃後史ノート戦後篇』インパクト出版会、一九九六年七月）において、ウーマン・リブとは女性が自身の欲望に素直になることを肯定し、女性の欲望が男性によって評価され規定されていることに違和感を持つことも肯定し、そして男性による意味付けの中に取り込まれてしまった女性の欲望を取り返すことまで目指す運動であると語る。

（12）ウーマン・リブ運動の中心的存在であった田中美津『いのちの女たちへ ――とり乱しウーマン・リブ論（増補新装版）』（パンドラ、二〇〇四年一一月）はウーマン・リブを次のように説明する。

リブを運動化して間もない頃、それまであぐらをかいていたくせに、好きな男が入ってくる気配を察して、それを正座に変えてしまったことがあった。あぐら革命的、正座反動的みたいな偏見から己れを嘆く訳ではないが、しかし、楽でかいていたあぐらを正座に変えてしまった裏には、男から、女らしいと想われたいあたしがまぎれもなくいたのだ。その時、もし、意識的にあぐらか、正座かを己れに問えば、あぐらのままでいいと答えるあたしがいたと思う。しかしそれは本音ではない。その時のあたしの本音とは、あぐらを正座に変えてしまった、そのとり乱しの中にある。（中略）あたしたちの本音の、その大部分は無意識の中に隠れていて、しかも人間は無意識で成り立っていると云ってもいい位なのだ。女の場合、その無意識を形づくっている核心に、女は女らしくがある。つまり、〈女は女らしく〉という論理は、本来たてまえであるにもかかわらず、そのたてまえは女の中に深く血肉化されていて〈無意識〉という意識を形づくるまでになっているのだ。あぐらから正座に変えた、そのとり乱しの中にあるあたしの本音とは〈女らしさ〉を否定するあたしと、男は女らしい女が好きなのだ、というその昔叩き込まれた思い込みが消しがたくあるあたしの、その二人のあたしがつくる「現在」に他ならない。（中略）リブは常にふたつの本音から出発する。その間のとり乱しから出発する。

つまり、緑はワタナベに想いを抱くようになったことで「女らしさ」に縛られない女性から「女らしさ」を体現する女性に自ら変化してしまっていると論じる、半田前掲論（注4）、堀口前掲論（注4、10）、太田前掲論（注6）、酒井前掲論（注10）、渥美孝子「ノルウェイの森――空白を残したままの成長物語」（『村上春樹がわかる。』朝日新聞社、二〇〇一年一二月）は、〈ふたつの本音から出発する〉というウーマン・リブの重要なポイントを見落としているという点で不十分と言わざるを得ない。

（13）事実、緑は繰り返し男性が抱く女性幻想に異議を唱える。《髪の長い女の子》は《上品で心やさしくて女らしい》と思い込み、それに基づいて女性を評価する男性を《まるでファシスト》だと批判する。タンポンの話をしたり、白以外の下着を身に付けたりすると怒る交際相手のことを《偏狭》だと評する。女性だけに食事の準備を担わせるサークルの男性たちの行為を《完全な性差別》であると非難する。そして、それに何の疑問も抱かない男性たちに憤り、サー

クルを自ら辞めるという決断までしている。

(14) 事実、緑はワタナベに《あなたがこうしろって言えば私なんだってするわよ。私多少むちゃくちゃなところあるけど正直でいい子だし、よく働くし、顔だってけっこう可愛いし、おっぱいだって良いかたちしているし、料理もうまいし、お父さんの遺産だって信託預金にしてあるし、大安売りだと思わない?》と語る。

(15) 谷本奈穂『恋愛の社会学――「遊び」とロマンティック・ラブの変容』(青弓社、二〇〇八年四月)による。谷本は、若者向け雑誌記事を中心としたメディア分析を通して恋愛について考察する。その際、まず対象年齢層が一五歳から二五歳の女性誌、男性誌をそれぞれ三冊ずつ選択し、次に同雑誌の恋愛記事を一九七〇年代、一九九〇年代、二〇〇〇年代で比較し分析するという方法を採用している。そこで一九七〇年代の恋愛記事を分析する中で、男性が女性にアプローチする際の記事は見られるものの、その逆は見られないという事実を谷本は発見する。一方、一九九〇年代、二〇〇〇年代になると女性から男性へのアプローチ記事は多くなる。しかし、一九九〇年代以降の恋愛記事で指南される女性から男性へのアプローチ方法というのは、〈好意〉の〈におわせ〉方や〈隙やきっかけ〉の作り方といった、〈相手が告白してくれるようにアプローチ〉する方法に他ならない。また、〈男性に尽くすという方法もまだ支持されている〉。つまり、主導権は変わらず男性に委ねられているのである。

(16) 吉本隆明「村上春樹『ノルウェイの森』」『新・書物の解体学』メタローグ、一九九二年九月【初出:『マリ・クレール』、一九八七年一二月】

(17) 西井開『「非モテ」からはじめる男性学』集英社、二〇二一年七月

(18) 緑と同様に、突撃隊は現実社会における「男らしさ」からも疎外されている。一九六九年に毎日新聞が行った「生活の価値観」全国世論調査(「生活の価値観調査(面接/無作為)一九六九年一一月二三日~二五日」毎日新聞、一九七〇年一月三〇日、朝刊)では、「やさしさ」、「細やかさ」、「積極性」、「たくましさ」、「情熱」、「沈着」、「勇気」、「温かさ」、「つつましさ」、「寛大」という言葉の中から、「男らしさ」と思うもの、「女らしさ」と思うものをそれぞれ選んでもらう(複数回答可)という質問項目が用意されている。「男らしさ」に関する結果は、「勇気」が八〇%と最も多く、次いで「たくましさ」、「積極性」、「寛大」。一方、「女らしさ」に関しては「やさしさ」が八八%と最も多く、次いで「温かさ」、「つつましさ」、「細やかさ」が選ばれている。どちらも男女の回答率に差異がないことから、男女共通の認識であると考えられる。ただ、この調査で回答選択肢に挙げられている言葉には定義が付されていないため、例え

ば「たくましさ」といっても肉体的にたくましいのか、精神的にたくましいのか、何をもってたくましいとするのか、といったことを判断することが難しい。しかし、どれほど広く意味を取ったとしても、突撃隊に「勇気」、「たくましさ」、「積極性」、「寛大」の要素は見出せないだろう。むしろ、寮の庭にいた蛍をわざわざ捕まえて、それを《きっと喜ぶから》《女の子にあげるといいよ》とワタナベに贈る突撃隊の姿に、「細やかさ」、「やさしさ」、「温かさ」の要素を感じ取ることができる。つまり、突撃隊は一九六九年頃の現実社会においても「男らしさ」から疎外された男性であったと考えられる。

(19) 伊藤公雄『男性学入門』(作品社、一九九六年八月)は、一九九〇年に「男らしさを問う」と題し開催されたシンポジウムが女性問題やフェミニズム、男性の売春問題等に関わってきた男性たちの手によって生み出されたこと、このシンポジウムで〈男たちもまた、この男性社会の中で男らしさの鎧に縛られ、窮屈な思いをしているのではないか〉、〈男たちは、男の〝メンツ意識〟でがんじがらめにされ、自分の感情をうまく表現できないんじゃないか〉、〈〝男の解放〟がこれからは問題になるんじゃないか〉と語られたことが契機となり、日本で初めての男性運動グループである「メンズリブ研究会」が一九九一年四月に発足したと紹介する。また、伊藤公雄『〈男らしさ〉のゆくえ――男性文化の文化社会学』(新曜社、一九九三年九月)は、〈「ひとつ」〉を目指す近代社会によって「男」は支配的、主体的、中心的な存在として社会的に固定化され、一方「女」は周縁的な存在として固定化されたと説明する。そして、人間が「男らしさ」や「女らしさ」による抑圧から自由になるためには、〈「ひとつ」〉ではなく多様性や複数性を志向する必要があると指摘する。

(20) 突撃隊が右翼学生らしからぬ格好をするように変化したことを「男らしさ」を引き受けていると解釈することは可能だろう。突撃隊は何をしても笑われる環境にいるのだ。そこから逃れるために「男らしさ」を身に付けたがっていると推論するのは誤りではない。むしろ、このように揺れ動いていることが重要なのである。だからこそ、メンズ・リブ的男性になる可能性が残されるのだ。

(21) 突撃隊と〈「非モテ」男性〉に類似性があること、さらに、「非モテ」を探求するためのグループ、Re-design For Menがメンズ・リブの活動を受けて生まれたことを踏まえると、突撃隊がメンズ・リブ的な男性になる可能性を秘めた存在であるというのは興味深い指摘になり得るだろう。

(22) ぐるーぷ・闘うおんな「便所からの解放」(井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『リブとフェミニズム(日本のフェミニズム1)』岩波書店、一九九四年一一月【初出:一九七〇年】)

(23) しかし、これは自覚しただけに過ぎない。メンズ・リブが興る以前の一九八六年は、未だ男性中心主義による支配が根強かったはずだ。つまり、自覚はできても、それを受け入れ、批判することは容易でなかっただろう。故に、この手記は一九八六年という「現在」に戻ることなく、「過去」のまま幕を閉じるのだ。「現在」のワタナベにとって、自分が「男らしさ」に縛られているという事実は受け入れ難いからこそ、あくまで「過去」の自分は「男らしさ」に縛られていたのかもしれない、という立場を貫いているのだ。つまり、彼は男性中心主義的な自分と男性中心主義に批判的な自分の間で《混乱》し《揺り動か》されているのである。

(24) 彼らが友人になったのは、『グレート・ギャツビイ』を好むという共通点からだったが、やがてガール・ハントにばかり繰り出すようになる。そこでワタナベは男性共同体内で誉となり得るほどの女性経験数を獲得するが、その殆どは永沢の《魔力》によって得られたものである。確かにワタナベは、「男らしさ」の象徴として崇められる永沢に対して、《ちっとも敬服も感心もしなかった》のかもしれない。永沢を「男らしさ」の象徴たらしめる要素にも全く興味がなかったのかもしれない。しかし、永沢が持つ権力を利用していることは揺るがぬ事実である。

(25) これは酒井前掲論（注4）でも指摘されている。しかし、ワタナベが《突撃隊ジョーク》を〈寮内に流通させ〉たことで突撃隊は《ひどく混乱》し、〈多分、大学を中退し、学生寮から〉姿を消したとする酒井の論は、なぜ《突撃隊ジョーク》を〈寮内に流通させ〉ることが突撃隊の自我を〈混乱〉させることになるのか、なぜ〈自我が混乱〉すると〈学生寮から消え〉ることになるのかを明確にしていないという点で不十分だと言わざるを得ない。

(26) ワタナベは、突撃隊がルームメイトであることを寮生たちから同情された際に、突撃隊は《こちらが身のまわりを清潔にしている限り》、《一切干渉》してこないから《かえって楽なくらい》だと語る。彼は突撃隊と過ごした《一年半のあいだに、部屋を清潔にすること》が《習性の一部》になったとも語っているが、彼は本来、ある程度は自分の《身のまわりを清潔》にしているタイプなのである。そうでなければ、突撃隊との暮らしは苦になっていたはずだ。また、彼はアイロンがけを好む。《くしゃくしゃのものがまっすぐになるのって、なかなかいいもんですよ》と語る彼からは、整頓された状態を好む突撃隊と似たものを感じる。

(27) ワタナベもまた、女性のヌード写真に関心を示さない。直子と出かける度に、《どんな体位でやったかとか彼女のあそこはどんな具合だったかとか下着は何色だったか》と寮生に冷やかされても、その話題に興味を示すことはない。永沢とガール・ハントに何度も赴きながらも実際のところ

は、《知らない女の子と寝るのはそれほど好きでは》ないのだと語っている。

(28) 退寮直前のワタナベは、《夜の町で酒を飲んで、適当な女の子を探して、話をして、ホテルに行ってという過程》が《うんざり》するのだと語る。そして、永沢の誘いを断るようになる。男性共同体内で優位に立つべく利用していたはずの永沢を拒絶するというのは、ワタナベが男性共同体に執着しなくなったことの表れだろう。

(29) 男性を縛る「男らしさ」の観点から本テクストを読むことで初めて、一九八六年のワタナベに突撃隊が与える意味を明らかにすることが可能となるだろう。

(30) ワタナベは直子の《完全な肉体》を見て以来、直子のことを《美しい肉体》として形容するようになる。つまり、彼は直子の身体を《完全な肉体》と意味付け、彼女を《美しい肉体》を持つ女性として縛っているのだ。

(31) 村上前掲論（注8）では、次のように述べられている。

この話は基本的にカジュアルティーズ（うまい訳語を持たない。戦闘員の減損とでも言うのか）についての話なのだ。それは僕のまわりで死んでいった、あるいは失われていったすくなからざるカジュアルティーズについての話であり、あるいは僕自身の中で死んで失われていったすくなからざるカジュアルティーズについての話である。僕がここで本当に描きたかったのは恋愛の姿ではなく、むしろそのカジュアルティーズの姿であり、そのカジュアルティーズのあとに残って存続していかなくてはならない人々の、あるいは物事の姿である。成長というのはまさにそういうことなのだ。それは人々が孤独に戦い、傷つき、失われ、そしてにもかかわらず生き延びていくことなのだ。

(32) 野中潤「『ノルウェイの森』と生き残りの罪障感」（宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』おうふう、二〇〇八年一一月）では、カジュアルティーズが、身近な人間に次々と先立たれ、一人生き残ってしまったワタナベの傷付きと関連して論じられている。しかし、村上前掲論（注8）で、カジュアルティーズが戦闘員の減損と訳されていることを踏まえると、不十分な指摘だと言わざるを得ない。これは闘いの観点から論じる必要があるだろう。つまり、「男らしさ」を巡る闘いの観点からカジュアルティーズを捉えることには一つの意義があるのだ。